

第3回 精華町総合計画審議会 議事摘録

■日時・場所

- ・令和4年3月24日（木）15:30～17:30
- ・精華町役場 6階 審議会室

■内容

1. 開会

2. 委員紹介

出席委員の紹介

3. 議事

川勝会長 今回から新たに委員として加わった石田委員から自己紹介をお願いしたい。

石田千乃委員 「せいかカフェ・ラボ」のテーマ別の参加者から選出いただいた。4月から大学2回生となる。将来、子どもたちの視野や可能性を広げられるような小学校の教員になりたいと思っている。精華町の教育やまちづくりなどについて皆さんと考えるとともに実践していきたい。

(1) 基礎調査の進捗状況について

事務局 令和3年度で基礎調査を完了する予定であったが、コロナ禍の影響を受け、住民ワークショップの第3回開催が延期となった。3回目終了後に提言を取りまとめ、今回の審議会で報告する予定であったが、3回目は、テーマ別が3月26日、地域別が4月に開催予定であり、次回の審議会で報告させていただく。

事務局 資料1～資料3について説明

阿部副会長 総合計画の総括に関連して、総合計画の「総合性」をどのように評価するべきか、審議会で共有したい。個々の施策については丁寧に評価されていると思うが、それらを総合計画としてどのように評価するべきかは難しい。

また、施策ごとに指標を設定し、数値により客観的に評価しているが、数値で評価しやすい施策と、そうでない施策がある。例えば、「道路」は数値評価になじみやすいが、「住宅」や「市街地形成」などでは、数値だけでは漏れ落ちてしまう部分もあり、数値以外の評価についても記述が必要と考える。

川勝会長 総合計画の総括に関する意見として、議論を進めていく上で重要な視点の示唆があった。1点目は、個別の施策の評価は理解しやすいが、全体としてどのように評価するか、「総合性」「個別性」の両方が大事で、特に総合計画では「総合性」が重要になるとの指摘である。また、総合計画の策定後、実施状況

を検証し、評価結果を次の改善に結びつけていく視点が必要であるが、その際に定量的に評価できるものと難しいものがあり、数値評価から漏れ落ちるものを取り込んでいく手法が重要とのことであった。この点に関連して、評価には時間的な要素もある。例えば、教育の効果は短期的には生まれず、時間をかけて長期的に評価すべきものであり、時間軸の視点も重要である。

杉下委員

人口推計について、新しい住宅地開発による人口増は算出しやすく、理解しやすいが、一方で、全国各地で問題となっている空き家や放置された住宅の管理・活用も重要である。近隣でも、かつての新興住宅地が高齢化し、大規模な学校が寂れて様変わりし、空き家が課題となっている地域がある。この点も踏まえて全体的なまちづくりを考える必要があると思う。

住宅地開発については、個別の地域だけでなく、旧来の地域も含めて、まちづくり全体をどのように進めていくのかという方針が見えにくいように思う。

事務局

総合計画の総括については、政策、施策、事務事業という3段階のうち、施策レベルの41の柱で評価を実施した。総合性の評価という点では、もう1段階上の政策レベルに関する調査項目を設定できれば、総合性と個別性の相互の関係性が見えるものと考えられる。全41施策の調査とは別の機会を設け、政策レベルでの満足度の把握などを考える必要があると感じた。

指標については、例えば「歴史」や「文化活動」、「障害福祉」などの施策もそうであるが、我がごとでない、当事者でない項目については満足度が低い傾向にある。その一方で、当該施策の指標による評価や行政の自己評価については、概ね達成できているという評価が多い。現在の指標では漏れ落ちている内容についても織り交ぜて評価できるように指標の設定を工夫し、満足度と指標の相関関係を示すことができればと思う。また、どうすれば我がごととなって、活動に参画してもらえるのかについても考えていきたい。

人口推計における社会動態の考え方は、今ある住宅が存続することを前提とした部分と新たな開発による新築戸数の純増の2つの視点しかなく、空家への人口流入による人口増などの視点はない。議会の総合計画特別委員会でも議論があり、子育て施策の充実による子育て世帯の転入を見込んでどうかとの意見もあったが、新築戸数が増えなければ転入による人口増はない。本町では開発を抑制している状況にあるが、転入を見込むには住宅開発が必要となる。

令和15年度から34年度までの新たな人口定着見込みについては、開発の可能性のあるエリアをある程度具体的にイメージして人口を算出している。次回の審議会では、地図など提示させていただき、説明したいと考えている。

清水委員

総括シートの「国際交流」の施策では、今後の方向性において、外国人住民の増加が見込まれるとある。人口推計を考える上で、外国人住民の推移をどのように想定しているのか。他の自治体では、企業立地に伴って外国人住民が増えるケースがあるが、想定などはしているのか。

- 事務局 学研精華・西木津地区には研究施設があり、以前から外国籍の研究者が居住されていて、せいかグローバルネットワークと連携して国際交流にも取り組んできた。今回の推計では、外国人住民の推移は試算していないが、学研地区への企業進出による外国人住民の増加は想定されることであり、それに対応した施策を講じる必要性は認識している。
- また、居住実態などは把握できていないが、ここ10年で外国人登録者数は倍近く増加している状況にある。
- 綿崎委員 総括シートの「浸水対策」の施策について、指標の中で整備率の目標値が特に低いものがある。目標値は達成しているが、目標設定が低いのではないか。
- 事務局 雨水路の整備率については、分母を認可上の全延長としている。その中で、菅井雨水路の整備率は目標値が他に比べて低い。雨水路整備については莫大な予算が必要となるため、総合的に勘案した中で、基本的には下流から順次整備を実施している。現在は、九百石川2号雨水路について、JRの軌道下の河川整備を5カ年計画で進めており、これが完了すれば、当初計画していた一期整備は一旦完了と考えている。また、本町には雨水の強制放水ポンプ場が2箇所あるが、今後はポンプ場の増強にも併せて取り組む計画である。その後、全体の状況を見ながら上流についても整備を進めることになる。このような整備計画について説明責任を果たし、理解が得られるよう努めていきたい。
- 青井委員 総括シートでは、満足度や重要度が数値で示されていて分かりやすいが、目標値の基準などはあるのか。他地域でも同じ調査が実施されていれば比較可能であるが、町の独自調査の場合には評価は難しい。経年比較が可能である点は有用だが、ここ数年についてはコロナ禍の影響も加味する必要がある。その影響により、防災やコミュニティーに関する内容が、過去と比較して低下してきていると思われる。私の専門である食やスポーツは、健康、医療、福祉などの相関関係についても分析できるような集計も有効である。
- 事務局 施策によって満足度の基準に差があるものと考えており、一律に基準を何%以上とすることは難しい。当該施策について、本人が活動に関わっていれば、自身で満足度の基準を持っていて、満足度も高い傾向にあると考えられる。今回の調査では、施策間の相関関係の分析までには至っていない。地域別や年齢別のクロス集計などのデータをweb上に公開し、1つの施策に対する多角的な分析の材料として提供することは可能である。
- 寺本委員 中学生の提言書は、10年後にこの地域を支える今の生徒たちの思いである。環境、教育、福祉などを中心に前向きな意見が出ている。その中に「安定した税収入が得られる精華町」という提言があり、総合計画の各施策を進めるためには財政の裏付けや持続性が重要であると思った。精華町は学研都市であり、

世界的に有名な企業や先端技術を有する企業が立地しており、そのような企業の進出をさらに促す取り組みが重要である。エネルギー問題に関連して、ヨーロッパでは、ここ数年でエンジン車から電気自動車に置き換わるとの予想がある。精華町でも先を見据えて、急速充電ステーションへの補助等による電気自動車の推進や、大阪・関西万博で計画されている空飛ぶタクシーの実証実験の誘致などにより、先端企業の立地を促すことも1つの方策である。そこで得た税収により教育や福祉、環境などを充実し、まち全体を持続可能でバランス良く発展させていくことが重要であると思うが、行政として具体的な計画はあるのか。

事務局

本町は学研都市の中心地であり、カーボンニュートラルに対するスタンスや先導的取り組みの必要性は認識しており、令和4年度の町長の施政方針でも述べられているが、計画段階にある具体的な施策はない。この点に関して、学研の立地企業は高い見識と意識を有しているので、意見交換をする中で、短期的にでも取り組み可能な施策については検討していきたいと考えている。

また、学研都市は人類的課題の解決を目標に掲げており、その中心自治体としてエネルギー問題には関心を持って見ている。令和3年度には、新たに水素社会の構築を目標とする協議会に参画して情報収集に取り組み、その一環として、福井県敦賀市への視察を実施した。同市では原発の廃炉等の課題を抱えながら、次のエネルギーとして水素を軸にしたまちづくりに取り組んでおり、本町においても今後の参考にしたいと考えている。

事務局

資料4～資料10について

川勝会長

資料9のお宝マップは、京都府立大学京都地域未来創造センターが協力して取り組んだものである。子どもたち自身の感性で見つけた地域の魅力をマップにデータとして入力しているため、いつでも更新が可能で発展性がある。今回の小中学生のアンケートや作品コンクールと併せて、子どもたちの意見を取り入れる1つの視点として理解いただきたい。

石田千乃委員

精華町で生まれ育ったが、第1回のテーマ別ワークショップに参加して、精華町を知らないことを実感した。様々な年代の方や精華町が好きな方と話すことで、精華町により関心を持ち、より良いまちにしたいと思った。

森本委員

私は40年以上精華町に住んでおり、10年前の総合計画のワークショップにも参加した。小学生の頃には遠足などで町内の様々な場所を回っていたが、今はそのような機会が少ないように思う。町内には、様々な企業や歴史のある神社などがあり、子どもの頃から町内の様々なものに触れることで、地域への愛着が増すと思う。そうして大人になった時には、審議会などに参加してまちづくりを考えてもらえると、より一層良いまちになると思う。

精華町では新旧の地域に格差があるように感じており、京阪奈新線新祝園ルート
の必要性についてのアンケート結果にもそれが出ている。新市街地の住民
や学研企業に勤める方は新線の必要性を感じていると思うが、それに比べ
ると、旧来の地域の住民は新線の必要性を感じている人の割合は低い。

また、まちづくりでは人口の増加を目標とする場合が多いが、人口増加を
目指さなくても良いまちづくりは可能であると思う。今の住民や働く人た
ちの満足度の向上に着目することで、駅周辺やまちの活性化などにつなが
ると思う。新たな開発に注力することで、今あるもの、例えば、祝園駅
周辺が衰退するようなことが起きないか心配である。

古海委員

中学生の提言に「高齢者が大切にされるまち」という内容があった。子
どもから見ると、高齢者は自分の未来の姿であり、元気で楽しそうな高
齢者が多いと、未来は明るいと感じると思う。

精華町でも人口増から人口減に移行するとともに、高齢者の割合が増
えてきており、定年後は家にこもりがちな人が多い。その中には、多く
の優秀な人が埋もれていると思う。そのような人たちに、社会貢献に取
り組むきっかけとなる情報を提供することで、地域で活躍してもらいた
い。住民自らがまちづくりに関り、精華町に住んで良かったという実感
を得ることで、それを見た子どもたちが、年を取ることは楽しいと思
って欲しい。高齢者が我がまちを知り、心が動くきっかけの1つとし
て、本当の大学のように4年間をかけた高齢者大学などの取り組みをし
ている自治体もある。

並河委員

アンケートの追加分析に関連して、「公共交通」や「商工・サービス業」
などがニーズの高い取り組みとなっており、その点からも祝園駅周辺
の有効活用は課題であると思う。一方で、「景観」や「まちなみ」の施
策の満足度が高いことから、現在の景観等の維持も重要である。開発
と保全のバランスをとることは難しいが、良好な環境を維持しながら、
税収増に向けて取り組むことが必要である。また、「農業」と「観光」
は、満足度、重要度ともに低い、捨てるべき施策ではない。このよう
な施策にもテコ入れしつつ、ニーズの高い取り組みを伸ばしていく必
要がある。

高橋委員

京阪奈新線新祝園ルートの必要性は全体として高いが、働く世代で
比較的低い理由は、自動車の利用が前提となっていると考えられる。
一方で、学生や高齢者にとっては公共交通機関は必要不可欠である。
自動車送迎に頼ることで、公共交通の利用が伸びず、また、コロナ禍
もあって公共交通の利用が低下する悪循環になっている。まち全体
で公共交通を利用する方法を考えていく必要があると思う。

有識者ヒアリングの中に、大学との提携もまちづくりの方法の1つ
の内容があった。精華町には学研都市の研究施設があるので、そこにも
っと学生が集まるようにできればまちは生き生きするとのことであり、
学生が集まるような

方法を考えることも、町を活性化する方法の1つである。

杉下委員 審議会の資料は、スポーツ協会として非常に参考になる。総括シートでは、「文化」「スポーツ」は満足度が低く、残念に感じている。コロナ禍が落ち着いた後、どのような取り組みを進めるべきか、教育委員会と連携し、スポーツを通しての健康づくりやまちづくり、絆づくりについて議論していきたい。

勝田委員 中学生の作文の中に「精華町の企業に勤めたい」との内容があり、精華町に立地する企業の1つとして、子どもたちの目に魅力的に映る、働きたいと思ってもらえるような企業にならなくてはと、身の引き締まる思いがした。

北尾委員 「環境」に関連して、精華町ではゴミ収集はまだ無料で、ゴミ分別アプリなどもあって便利である。そのような状況にも関わらず、分別のルールを守っていないゴミが出されていることもある。これが悪化すると、いずれは有料化せざるを得なくなる。今の便利さを認識し、個人の意識を変える努力が必要だと感じている。

河合委員 各資料を見る中で、学研都市への期待や存在が非常に大きいと感じた。一方で、これまでの基礎調査の結果を総合計画にどのように位置付けていくか、何が大事で何を柱とするのか、議論を進める中で浮かび上がってくる精華町の社会課題が重要になると思う。住民や働く方の精華町への思いや子どもたちからの将来への期待と、有識者による社会の方向性の間をつなぐプロセスを考え、まちの方向性をどのように取捨選択していくのかを議論する必要がある。

第1回審議会において、町長からは、自立のまちづくり、人材育成が重要なポイントと考えているとのご発言があった。自立のまちづくりの視点では、精華町では当面の間、大きな人口減はないが、日本全体では人口減少や高齢化が進むことで、様々な社会課題や行政課題の発生が想定されるが、これを住民と一緒に考えていくプロセスが必要であると感じた。

精華町では、学研都市の特色を活かし、人とテクノロジーを掛け合わせることで社会課題の解決を目指すことにより、魅力あるまちづくりにつながると思う。コミュニティも含めた人材育成、学研都市の成果である科学技術を組み合わせ、まちづくりに組み入れることを議論することも1つの方法と考えられる。

岡井委員 まちづくりには、将来を担う子どもたちの思いを踏まえる必要があり、小中学生へのアンケート調査は重要であると思う。子どもたちに「精華町に住みたい。町内で就職したい。」と思ってもらうことは大切で、そのためには我がまちを知ることが必要だと思う。例えば、町のバスは1台しかないが、町内の様々な場所を訪れる行事や取り組みに活用するため、バスの充実なども検討して欲しい。

また、精北小学校では、登下校時に子どもたちを見守るボランティアが多くおられる。そのような関わり合いにより、子どもたちも精華町は良いまちだと感じることに繋がる。子どもたちと高齢者が交流する機会などで、まちの未来を考えていくことが大切であると思う。

川勝会長

今後、基礎調査の結果を基に、どのようにまちを描いていくかを審議する大切なプロセスに入る。会議前半では、特に施策の評価に関心が集中していた。これは、皆さんが、計画をつくるだけでなく、事後的に繰り返し検証し、改善に結びつける必要があると認識していることの表れである。成果を評価する際に、何をもちょう果とするのか、その前提には住民ニーズを知る必要がある。住民としての成果は、ニーズが満たされたかに尽きる。今回の資料では、小中学生などのまちづくりへの参画が難しい世代の意見も拾っているが、多様な立場のニーズの発掘がまちづくりには極めて重要で、ニーズの発掘がまちづくりそのものであると感じている。それが明確になれば、成果となり、評価の対象となる。

これまでの基礎調査資料や審議会での意見を振り返り、次回からの本格的な審議において意見を頂戴したい。その際には、住民ニーズがどこにあるのか、また、多様な立場のニーズを意識することが重要である。

4. その他

事務局

今回が年度内最後の審議会となるが、次年度も引き続き審議をお願いしたい。第4回審議会は、6月頃の開催予定で、改めて日程を調整する。

室外に絵画コンクールの入賞作品を展示しているので、鑑賞していただきたい。

5. 閉会